

Obituary

寺林 進：柴田承二先生と植物研究雑誌

横浜薬科大学漢方薬学科

Susumu TERABAYASHI: Dr. Shoji SHIBATA's Contributions to *The Journal of Japanese Botany*

Laboratory of Pharmacognosy and Medicinal Resources, Yokohama University of Pharmacy,
601, Matano-cho, Totsuka-ku, Yokohama, 245-0066 JAPAN
E-mail: s.terabayashi@hamayaku.ac.jp

柴田承二先生が2016年7月12日に逝去されました。心から哀悼の意を表します。享年100歳でした。

柴田承二先生が植物研究雑誌の編集員になられたのは、1986年5月（第61巻8号の編集会）からです。本誌は、植物分類学と生薬学の発展をめざす学術雑誌であります。しかしながら、投稿論文、編集員など、植物分類学に偏重した内容になっていました。生薬学の論文がもっと投稿され、掲載されるために、生薬学者の編集員の増員が必須でありました。編集会の主要なメンバーで話し合った結果、生薬学の権威である柴田先生にお願いすることになりました。柴田先生は第2代編集長（編集主幹）の朝比奈泰彦先生（東京大学名誉教授）のお弟子さんであったことも大いに関係しています。幸い柴田先生には快諾いただきました。以降柴田先生の人脈も生かしながら、植物研究雑誌に生薬学の論文も投稿される数が増加しま

した。

当時は、原 寛先生が編集長をされておられ、津村研究所から編集員として岡田 稔氏が編集会の庶務を担当しており、私は岡田氏の助手として編集会に参加していました。原先生が1986年ご病気で亡くなられた後、編集委員長の後任として柴田承二先生がつかれました。編集長になられた後も、雑誌の編集面で妥協のない合理的な指導をいただき、世界的に優れた雑誌として世に出版を続け、植物分類学、生薬学発展に貢献してきました。植物研究雑誌はA5判毎月発行の雑誌でしたが、柴田先生を中心に雑誌のスタイルについても議論しB5判隔月発行の雑誌に改めました。この作業は膨大でこれに関しても柴田先生も大いに尽力されました。柴田先生が編集長を務められたのは20年間、1987年2月から2006年8月の第81巻4号までで、90歳のご高齢とあって編集長と同時に編集員もリタイアされました。